

## 個別の教育支援計画を応用した、問題行動への対話的な指導と支援

— 心を引き出し、受けとめ、なりたい自分へ導く —

たちばな なおき  
立花 直樹

**抄録：**校内で問題行動があった場合、停学や謹慎などの懲戒処分をおこなうことが多いが、こういった一時的な処分が児童生徒自身の行動変容にどの程度寄与するのかには疑問が残る。学校からの一方的な処分をもって問題行動への指導としたところで、むしろ対象児童生徒は自身の本音や欲求に蓋をし、それらの表現のしかたやコントロールのしかたを学ぶことができないのではないだろうか。そこで、本来は特別支援教育の文脈で扱われる「個別の教育支援教育」のコンセプトを応用し、児童生徒本人が内省して心の声を言語化し、そこからなりたい自分を描き、それに向けて学校、保護者が支援できるような仕組みを提案する。

**キーワード：**生徒指導、問題行動、個別の教育支援計画、特別支援教育

### I. はじめに

いじめや暴力行為といった問題行動は近年増加傾向にあり、文部科学省が令和 5 年度におこなった全国調査では、いじめ・暴力行為ともに認知件数および発生件数が過去最多となった（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2024a）。それぞれの増加の要因を、文部科学省（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2024b）がまとめている。いじめの認知件数の増加については、把握の精度の観点から次のように分析している。

いじめ防止対策推進法におけるいじめの定義やいじめの積極的な認知に対する理解が広がったことや、アンケートや教育相談の充実などによる児童生徒に対する見取りの精緻化、SNS等のネット上のいじめの積極的な認知が進んだことなどが考えられる（p. 2）

また、暴力行為の発生件数増加の背景については、「いじめの認知に伴うものや児童生徒に対する見取りの精緻化によって把握が増えたことなどが考えられる」（p. 3）としている。

これらのことから、問題行動の把握が進んでいることがわかる。まずは被害にあった児童生徒の命や人権を守ることが最優先である。一方で、問題行動を起こした児童生徒への対応は十分だろうか。問題行動の件数が増加していることは、それだけの加害者が存在するということであり、問題行動を起こした児童生徒の行動変容につながるような支援も被害者のケアと同じくらい重要である。

本稿では、いじめ、暴力行為に加え、暴言や試験

中の不正行為やなどといった学校現場で生徒指導案件として扱われるものを含めて問題行動と表現することとする。また、問題行動の認定プロセスについて言及することは本稿の趣旨から逸れるため割愛し、それを経て問題行動と認定された事案への対応に焦点を絞る。加えて、本稿は高校での取り組みをもとにした提案であることから、対象になる者を「生徒」と呼ぶこととする。

### II. 問題行動を起こした児童生徒への学校の対応

問題行動を起こした児童生徒と同じ空間で学び、学校生活を送ることは、他の児童生徒にとっては安心、安全が脅かされることとなる。そのため、問題行動を起こした児童生徒は別室で過ごしたり、懲戒として自宅で過ごしたりすることが多い。さて、この措置は問題行動を起こした生徒にとって、どのような意味をもつのだろうか。それまでの日常と切り離されることにより、自分の行動を省み、自分の行為の問題点や与える影響についてじっくりと考える時間を持つことができ、これが生徒指導上合理的でないと考える人はいないだろう。ただし、罰を与えることで問題行動をなくそうとしているならば、話は変わってくる。松山（2023）は、これまでの教育でおこなわれてきた罰を与える指導について、「確かに罰を実行すれば、子どもたちはすぐに問題行動を止めるかもしれませんが、しかし、罰が与えられなくなると、また問題行動は現れてしまいます」（p. 18）と指摘している。罰を与えるような指導には次のようなものが該当すると考えられる。

①反省することを強要する（作文用紙の枚数を指定して反省文を書かせる等）

②指導・支援内容ではなく懲戒処分の重さや期間を優先して決める

③学年主任や生徒指導部長の説諭をもって指導とする

いずれも、問題行動を起こした生徒の心の声に耳を傾けておらず、その生徒自身も自分の心に蓋をすることを学び、自然な気持ちや欲求を否定することにはならないだろうか。これでは、問題行動を起こした生徒に一時的あるいは表面的な変化が見られたとしても、本質的には課題に向き合ったことにはなっておらず、本人の自己理解や成長につながるとは考えにくい。

### Ⅲ. 特別支援教育の観点

特別支援教育の文脈では一人ひとりのニーズに応じた合理的配慮や指導計画、支援計画の必要性が提言されてきた（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課，2003）。この個に応じた支援の考え方は2022年に改訂された『生徒指導提要（改訂版）』（文部科学省，2022）にも現れていることに注目したい。

ここでは、生徒指導の目的が「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」（p. 12）と設定されているほか、方法についても以下のように言及されている。

カウンセリングという観点からは、児童生徒一人一人の生活や人間関係などに関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めるように働きかけたり、適切な情報を提供したりしながら、児童生徒が自らの意志と責任で選択、決定することができるようにするための相談・助言等を個別に行います（p. 27）

これらを踏まえると、問題行動を起こした児童生徒への指導においても、一人ひとりの事情や個性に応じて、自己実現ができるよう、本人の気持ちを受けとめながら支援することが求められていると言える。

### Ⅳ. 自分で立てる「なりたい自分」への成長計画

上記のような指導・支援をおこなうためには、児童生徒自身が自己と向き合い、自己の幸福追求や意志表示をすることが重要である。そうは言うものの、問題行動を起こす児童生徒はこういったことが苦手であるために適切な言葉や行動で自己表現ができな

い場合が多い。そこで、筆者は、生徒自身に内省を促し、アウトプットを引き出せるような様式を作成した。ワークシート（図1）を完成させることで、個別的教育支援計画にあたる「私の成長計画」（図2）につなげ、生徒本人・学校・保護者の三者で合意形成をしたうえで、支援をスタートさせることがねらいである。

以下にワークシートの項目ごとに、ねらいをまとめることにする。予め生徒に時間を与えて全て完成させてきたものに対して教師がフィードバックを与えて修正を加えることも、生徒が考え、記述する傍で教師が問いかけながら対話的に完成させていくこともできる。

#### （1）なりたい自分に気づく

はじめに、問題行動を起こした生徒に、なぜそのような行動に至ったのかを考えさせる。それが把握できていない場合であっても、自分の行動が問題行動であるという認識に基づき、その行動をとらない自分像が書かれることが想定される。善し悪しの判断をせずに、まずは本心を率直にアウトプットすることが大事だと考え、キーワードでもいいので書き出すことを求めている。抽象的な表現は具体化できるよう教師が支援する。譲れない部分も含め、なりたい自分像やこだわりが充分にアウトプットできた段階で、それらのうち優先度の高いもの、つまり個別の支援を通して達成したいものを選ばせる。

#### （2）なりたい自分へのステップ

達成したい自分像が決定したら、授業の逆向き設計と同じように、そのために必要な段階的な課題に意識を向けさせる。この課題はスモールステップにしておいた方が、進捗状況を確認するときの基準が増えることとなり、評価の質が高まる。細かすぎるぐらいに設定しておいて、想定よりも達成が早くなることのほうが喜ばしい。ここでも抽象的な言葉が並ぶことも想定されるが、達成度が確認できるように具体化しておきたい。

達成に向けてのステップの確認ができれば、次に達成できなかった、できそうにない場合のことを考える。ここが支援のポイントとなるのだが、誰のこういった支援が得られると達成しやすくなるかを考えさせることで、依存先を増やすことをねらう。こうすることで、進捗状況が思わしくない場合であっても、生徒が自分のせいにして自己肯定感を低下させることのないようにしたい。

#### （3）今の気持ち

生徒自身が自己と向き合い、自己の幸福追求や意

③④で作ったロードマップは、プラン通りにいかないことも多いですが、「もうしない」と決めたことも、守れなかったり忘れてしまったりするの人間です。そんな時、どうしますか？想定しておいて、できない自分を責めたり責められたりするのはいやでしょう。今回も、自分がどうするかだけでなく、周囲にどうしてもらいたいのかも考えましょう。

|        |         |
|--------|---------|
| 守れないこと | どうしてもらう |
|        |         |
|        |         |
|        |         |
|        |         |
|        |         |

3. 今の気持ち

ここまでなりたい自分に近づく方法を考えてきましたが、今どんな気持ちですか？先生に向けての解答ではなく、率直な自分の気持ちを表現してみてください。

1. なりたい自分に気づく

①なりたい自分を書いてみましょう。箇条書きでもキーワードだけでも構いません。いつになるか、実現できるかどうかは今考えなくても大丈夫です。変りたい部分だけでなく、変えたくない部分や守りたい部分、ここだけは譲れないという部分にも目を向けてみるといいかもしれません。

②上の中から、自分にとって優先順位が一番高いものを選びましょう。

2. なりたい自分へのステップ

①1―②で選んだものを実現するためのロードマップを作ってみましょう。逆算の発想が大切なので、「いつそうなりたいか」からスタートして、そのためにはいつまでにどうなっていきたいかを考えましょう。「…しない」という否定形ではなく、「…する／ている」という肯定形で書くようにし、必要なステップが書ければ一番下の行まで埋める必要はありません。また、時期は今のところの想定で構いません。

|       |                 |
|-------|-----------------|
| いつまでに | どうなっていきたい       |
|       | 1―②で書いたもの（＝ゴール） |
|       | そのためには…         |
|       | そのためには…         |
|       | そのためには…         |
|       | そのためには…         |

②上のステップを実現するために、自分の努力のみでは難しいことがあるかもしれません。どんな環境であれば実現しやすいか、誰（友だち、先生、保護者、外部機関など）のどんな助けがあれば助かりますか？周囲に甘えるつもりで思いつくことを書いてみましょう。

年 組 番 名前

図 1 生徒に内省を促し、アウトプットを引き出すワークシート

- 83 -

志表示をすることをこれまでしてこなかった生徒を前提に作ったワークシートであるため、ここまでの項目で内省したりアウトプットしたりする中で感じたことや変化したことがあれば知っておきたいという意図で設けた項目である。変化を前提にしているわけではなく、何もなくとも問題ない。むしろ、不安や違和感が表現されている場合はそれを受けとめたい。

#### （４）私の成長計画（図 2）

これは、ワークシート（図 1）で自己と向き合い、アウトプットしてきたことがらを、本人・保護者・学校の三者で確認し、支援の方向性について合意するための様式である。各項目がワークシートのどの項目番号と対応するかが書かれており、生徒は清書のつもりで記入をする。三者面談等で、本人の意志を大切にしながら合意形成をおこない、学校・保護者の支援内容を確認する。長期的ゴールや短期的ゴールがそれぞれいつまでを想定したものなのかを確認し、そのタイミングでこの様式に記入された内容をもとに進捗状況の確認や評価をおこなう。

| 私の成長計画                       |              |
|------------------------------|--------------|
| 長期的ゴール                       |              |
| 短期的ゴール                       |              |
| 【1-②、2-①】                    |              |
| 自分が重点的に取り組むこと                | うまくいかないときの対応 |
|                              |              |
| 【2-①、2-②、2-③】                |              |
| 年    月    日<br>本人署名<br>保護者署名 |              |

図 2 私の成長計画

## V. 効果と課題

### （１）効果

図 1・2 の様式を使って本人・学校・保護者の間

で方針を共有することで、学校と保護者が本人の行動変容や成長を見守り、共通の軸で指導・支援、経過観察や評価ができる。支援ニーズをもとに計画を立てて支援するという個別的教育支援計画のコンセプトと一致している。次に、自己開示や教員との対話を通して、問題行動を起こした生徒本人が教員への話しやすさが高まることが期待できる。これに関して、松山（2023）は「子どもの教師に対する安心感や信頼感は、不登校やいじめ事象、またはこども自身の自尊感情や自己肯定感などにも影響を及ぼすことが、心理学の研究において実証されています」（p. 24）と報告している。さらに、話しやすさは心理的安全性の因子のひとつ（石井, 2020）という研究もあり、心理的安全性の高い学校をつくることができれば、本人だけでなく他の生徒や教員、保護者にとって利益になるだろう。

教員や学校全体への効果もある。Ⅳで紹介した様式は、筆者が 2022 年に作成し、所属学年での問題行動対応のたびに使用を重ね、2024 年度には生徒指導部として前述の様式を採用して問題行動に対応することとなった。学年や生徒指導部といったチームで生徒の指導・支援をするうえで、共通のフォーマットをもつことが、生徒への接し方、教員間での情報共有に良い影響を与えている。例えば、複数教員が入れ替わって支援する際の引継ぎや継続的な指導が容易になった。同時に、複数教員がチームで支援することは、Ⅲで述べたような特別支援教育や生徒指導で求められている教員の指導・支援のあり方を、分掌全体で経験的に学ぶという教員研修の役割も担っている。コーチングやカウンセリングマインドは教師が生徒に接する際の基本ではあるものの、個別的教育支援の考え方を身につけることで、これから出逢う生徒への指導・支援にも好影響を及ぼすことだろう。

### （２）課題と展望

フォーマットの共通化や研修機能により教員集団としての生徒へのアプローチが容易になったとはいえ、実行可能性の課題は残る。例えば、問題行動が同時に複数起こった場合や、ひとつの事案であっても関係者が複数に及ぶ場合、対話を中心としたこのアプローチは大きな負担となる。特別支援教育についても言えることだが、校内の生徒支援体制を整えておくに越したことはない。本校では、問題行動が起こった際に生徒指導部やその生徒の所属学年で対話的なアプローチに取り組み始めたところであり、全教員にこの指導・支援が浸透しているとは言えない。効果として言及した学校の心理的安全性の向上



をめざすうえで、学校全体としての生徒指導観のアップデートが必要である。

次に、筆者が作成したワークシート（図 1）は、一定のメタ認知能力を備えた高校生を対象にしたものである。したがって、生徒児童の発達段階によっては、このまま活用ができるとは言えない。言葉遣いを調節する、教師からの支援を増やすなどして、生徒児童の内省を促し、言語化するというアプローチの本質が失われないように留意する必要がある。

こういった乗り越えるべき課題はあるものの、問題行動を起こした児童生徒の行動変容や成長を一番に考え、罰に頼らない指導・支援をすることは、児童生徒本人のその後の人生を豊かなものとするうえで欠かせない。問題行動が起きないことが一番ではあるが、問題行動に訴えるしかなかった児童生徒の思いを受けとめ、なりたい自分へと導けるよう、筆者も引きつづき課題を克服できるよう努めたい。同時に、本稿が同じような課題認識を持っておられた方への一助となれば幸いである。筆者が提案する対話的アプローチの要素を各現場の実情に応じてアレンジしていただければ、児童生徒へのより良い支援につながるだろう。

## 参考文献

- 石井遼介（2020）「心理的安全性のつくりかた『心理的柔軟性』が困難を乗り越えるチームに変える」日本能率協会マネジメントセンター
- 工藤勇一・苫野一徳（2022）「子どもたちに民主主義を教えよう 対立から合意を導く力を育む」あさま社
- 松山康成（2023）「学校・学級が変わる！はじめてのポジティブ行動支援」明治図書出版
- 文部科学省（2022）「生徒指導提要（改訂版）」
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2024a）「令和 5 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2024b）「令和 5 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2003）「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/attach/1361204.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/attach/1361204.htm)（2024 年 12 月 24 日閲覧）

## A Counseling Approach to Guiding Students Who Have Behavior Problems

— Inspired by the Individualized Education Program —

TACHIBANA Naoki

**Abstract:** When students exhibit problematic behaviors at school, schools often execute disciplinary actions including suspension. However, it is questionable how such temporary measures contribute to students' behavioral change. Rather, it may make students ignore their true feelings and desires and prevent them from learning how to express and control their emotions appropriately. By applying the concept of the individualized education program usually executed in special needs education, this paper suggests an alternative approach in which students can reflect on themselves, verbalize their feelings, picture their ideal selves, and achieve them supported by their teachers and parents.

**Key Words:** students guidance, problem behavior, individualized education plan, special needs education